

献 辞

杉村芳美先生は、2016年4月19日に満68歳の誕生日を迎えられ、本年3月末日をもって本学を定年退職されることになりました。

京都府で生まれた先生は、1971年6月に東京大学経済学部経済学科を卒業、1978年3月に東京大学大学院経済学研究科博士課程を単位修得退学されました。その後、1979年4月に経済学部講師として着任され、1981年4月には助教授、1987年4月には教授に昇任されました。

杉村先生のご研究は、経済人類学、労働の意味論など幅広い領域にわたります。大学院在籍中の1975年4月にカール・ポランニーの『大転換』（東洋経済新報社）を共訳・出版し、日本における経済人類学の研究に先鞭をつけられました。その後、日本における労働の現代産業社会の体制を「人間の生の一面」としての労働の意味論の視角から分析した『脱近代の労働観—人間にとって労働とは何か—』（ミネルヴァ書房、1990年）を上梓されました。

「労働という現象は、経済学的思考を超えた解釈を要求している」。ポランニーが説くとおおり、「伝統的社会」では「労働」もまた「経済」と同じく「共同体（コミュニティ）」に「埋め込まれ」ていました。しかし、「近代産業社会の労働」は「自由で平等」な個人の「合理主義的」な経済活動としての「生産する労働」となり、そこでは「労働の意味が労働自体にとって内在的（＝目的）であるか外在的（＝手段）であるか」によって、労働は「自由」とも「必然（拘束）」とも観念されます。さらに、機械技術の発展につれて、「組織のなかでの労働」は、「個人か集団かどちらの側に比重をおいて受けとめられるか」に応じて、「自己対象化／疎外」あるいは「分業／拘束」として捉えられることとなります。

この「目的—手段」と「個人—集団」の二つの軸を設定すれば、①集団の

目的への「貢献」、②個人の目的としての「自己実現」、③個人的な生活手段としての「苦痛」、④集団における手段としての「役割」という「近代産業社会の労働がもつ四つの意味側面」が明らかになります。かつてはこの四象限は「勤勉性（インダストリー）」とも呼ぶべき「労働が常に有する二面性」を顧慮するような「常識的な精神の態度」の求心力によって辛くも平衡を保っていましたが、いまやその「中心溶融（メルト・ダウン）」によって「近代的労働の意味構造」は解体・発散しつつあると言えます。「長時間労働」に見られる「貢献」の「サービス化」、パート労働の増大に見られる「苦痛」の「パーツ化」、フリー志向に見られる「自己実現」の「プレイ化」、 「ME革命」に見られる「役割」の「ロボット化」——このように各象限で「労働の意味」の遠心的な過剰化が進んでいます。とはいえ、これもまだ「脱（ポスト）産業化」とはいえず、むしろ「超（ハイパー）産業化」の予兆ではあるまいかと杉村先生は懸念していましたが、この診断は的中したのではないのでしょうか。刊行直後に「労働を再考するための適切な水先案内」と書評（今村仁司氏）された『脱近代の労働観』は四半世紀余を経た今日でも最前線にあるといえるでしょう。

1990年8月から一年間の甲南大学在外研究員としての英国ケント大学での留学生活と、平成5年から世話人として携わった「OWL (Original Working Life) 仕事研究会」での社会人・職業人との交流・意見交換、その機関誌への執筆活動を踏まえて、そして何よりも1995年の阪神淡路大震災からの復興に勤しむ人々の「実際の姿」に力づけられて、1997年には一般読書人向けの新書として『「良い仕事」の思想—新しい仕事倫理のために—』を中央公論新社から刊行されました。前著の「序文」でも「奉公でも奉私でもなく、為すべきと信ずることをおこなうという意味での奉仕としての労働が個々の生において具体的な姿をとるとき、脱近代の労働が見えてくるのではないかと予測され、「人が有用性や必然性に縛られず労働の内的意味・価値を問い、

その意味・価値に自身をささげ托すとき、その労働は『仕事』なのである」とも予告されていました。その「良い仕事（グッド・ワーク）」の伝統が、ヘシオドスからシュマッハーに至る「労働の思想史」に即して辿りなおされ、「快樂主義の原理にたつ自己実現の労働は、勤勉の倫理に代わる新しい労働倫理となりうるのだろうか」という渾身の問いかけでもありました。

杉村先生はまた、大学院時代以来の師である西部邁氏が主宰する月刊誌『発言者』への寄稿をつうじて、時事的な政治・経済・社会問題をめぐる積極的な評論活動も展開されました。そこから「働くこと」に関わる文章39篇を採録したのが、『職業を生きる精神—平成日本が失いしもの—』（ミネルヴァ書房、2008年）です。随所に鏤められた——例えば、「社会は（そして個人もそうなのだが）変身できない。言うならば、われわれが革新と考えていることの多くは伝統的な現象なのだ」といった——穏和ながらも辛辣な警句からは、永年の幅広い読書と深い思索に培われた紳士的な風格の円熟が覗われます。

大学の行政面においても、杉村先生は、自らの「仕事」を誠実に勤められました。1998年から2002年には学長補佐、2002年から2004年には副学長に就任するかたわら2003年には大学企画室長も兼務し、2004年から2008年までは第14代学長、2012年から2016年までは第16代学長として、現在の3キャンパス体制の基礎固めと教育力向上のために文字どおり本学の「舵取り（ガヴァナンス）」に挺身されました。

そうした職務のさなかにあっても杉村先生が教育において最も心を砕いたことの一つは、職業選択に先行し、なおかつ社会人としての生涯の基礎を形作るような読書習慣の涵養であり、そのためにゼミナールでは独自の「新書マラソン」を実施しました。

以上のように、杉村先生は、本学在職中、研究・教育・行政のいずれの方面においても多大の貢献をされました。それは一人の紛れもない学究かつ教

育者の範を示されていると言えます。先生のご健康とますますのご健筆を心からお祈り申し上げますとともに、今後とも私たち後進にご指導，ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます次第です。

ここに本記念号を捧げ，先生に感謝の微意を表しますとともに，重ねて先生のご多幸を祈念いたします。

2017年3月

経済学部長／経済学会評議員長 小山直樹